

江口知秀氏の『けんせつのでんせつ』が描き出す世界は柔らかな語り口の中に甘美な毒を含んでいる。

建設に関する様々な伝説を取り上げる中であぶり出される事実のおもしろさ、世間一般が史実と信じている事柄の信憑性への疑問など、読み進むにつれ、多彩な毒に満ちた伝説ワールドの虜になってしまう。

本書は東日本建設業保証(株)発行の広報誌『EAST TIMES』連載の「けんせつのでんせつ」シリーズから二五話を選び一冊にまとめたもの。著者の江口知秀氏は同社が開設運営する建設産業図書館のライブラリアンであるとともに本誌連載の「建設ぶらり旅」の著者でもある。目次には「悲しい坂」と「水喰土」、「姫路城の伝説」、「法隆寺五重塔の鎌」など興味深い題名が並ぶ。伝説の舞台を求め、江口氏が今も日本各地へ旅を続けているように、建設に纏わる伝説は全国津々浦々に数多ある。

では、どうして建設には多くの伝説が生まれるのだろうか。著者は伝説が宿る事物の条件をこう断言する。「ずば抜けて大きかったり、奇妙な形や色であったり、相応しくない場所にあったり、特別な能力を備えているとか、感動でも、畏怖でも、奇異の念でも、人々に強い興味を懐かせる特異なものでなければならぬ」と。

城などの巨大な建造物、港や橋の建設、河川整備や新田開発などには、常に大事業ゆえの大

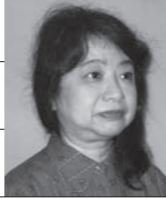
各 人 各 説

## 建設の伝説が 現代に語りかけるもの

日本文藝家協会会員

鈴木智恵子

Chieko Suzuki



きな困難が伴う。そうした苦難を乗り越えて完成へと至る過程には様々な物語があるからこそ、建設は伝説誕生の格好な舞台となり得る。著者はその背景とプロセスを探る中で、伝説を生み出さずにはいられない人間の性に思い当たる。それは極めて文学的な建設史へのアプローチであり、そこで著者は建設という行為に内在する豊かな人間性を発見する。建設に宿る伝説はテクノロジー一辺倒の現代の建設の世界を等身大の人間の手に取り戻すことである、と私は思う。

わが町横浜にも吉田勘兵衛の「吉田新田」開墾に纏わる「おさんの人柱伝説」がある。大きな入海を干拓して開墾した難工事の犠牲にされたおさんの話は子供心に恐ろしく、記憶に残った。

開港で誕生した横浜は関内を中心に発展した近代都市だが、その前史として、江戸時代に開墾された吉田新田の存在は大きい。新田は時代と共に町へと生まれ変わり、もう一方の中心地関外となった。横浜発展の礎となったこの大事業の完成は寛文七（一六六七）年で、二〇一七年に完成から三五〇周年を迎えた。この間におさん伝説は新田完成の折に勧請された日枝神社に付会し、いつしか神社そのものが「お三の宮」と呼ばれるようになった。

お三の宮の秋祭りは今も関外の子供たちの楽しみの一つで、高村光雲作の横浜一の大神輿「火伏の神輿」が伊勢佐木町などの跡地を練り歩く姿はハマの風物詩となっている。